

アイダ・ターベル研究④

— ニューヨーク修業時代 —

古賀 純一郎

要旨

3年前から連載中の20世紀初頭に活躍した米女性ジャーナリスト、アイダ・ターベル研究の第4弾である。今回は、フランス・パリから帰国し、ニュー・ヨークが本拠の雑誌社マクルアー社に入社し、新米の雑誌記者としてその頭角を現す数年間を扱う。年代でいえば、1980年代前半から1900年に入る直前までである。

帰国後、故郷で静養していたターベルに対しオーナーのサミュエル・S・マクルアーは、突然、ニューヨークに呼び寄せ、ナポレオンの伝記を書くよう指示する。ターベルは、情報収集のためのパリ行きを決意するのだが、予備的な取材に入ると、米国でも十分な資料を入手できることが判明、フランス行きを断念する。1894年11月からスタートした連載の評判は上々で、火の車だった経営の立て直しに大きく貢献する。気をよくしたマクルアーは、今度は、奴隷解放の父として知られる悲劇の第16代大統領アブラハム・リンカーンの伝記の執筆を提案、執筆はターベルが担当し、これも当たった。

ナポレオンとリンカーンの取材は、ターベルの別の世界への目を開花させる画期となる。米国の政治家、官僚、法律家、経済人、科学者、知識人階級などへの人脈が格段に広がる。

ターベルは、ジャーナリストとしての自分が活動する領域は、フランスではなくて米国と痛感、それまでの夢を断念し、国内の取材に専念する契機となる。そして、ターベルの名声を不朽のものにした大規模な市場独占形態であるトラスト（企業合同）の怪物、スタンダード石油との激突となるのである。今回はこの期間のターベルのジャーナリストとしての成長に焦点をあてる。

キーワード：調査報道 ナポレオン リンカーン 取材力 人脈

1. はじめに—地方紙こそチャンス

4回目入りしたものの連載は、依然として道半ば。次回以降に本丸、スタンダード石油との激突を予定している。これまでの論文の中で、たびたび言及しているように筆者が今回の連載で目指すのは、メディア界でここ数年その重要性が指摘されている調査報道の源流の解

明である。

調査報道のうち、ごく最近注目されたうちの筆頭といえば、2011年に朝日新聞社記者らの丹念な調査報道の末に明るみに出た「大阪地検特捜部主任検事の証拠改ざん事件」であろう。この事件は、障害者団体の刊行物に対する郵便料金が減免される制度を悪用し、障害者とは一切関係のない刊行物を郵便し、多額の料金を免れていたダイレクトメールの会社、広告代理店などを摘発した事件に関連して発生した。制度の利用のためには、障害者団体であることを認定した当局の証明書が必要となる。この証明書がねつ造された文書だったことから当時の厚生労働省の幹部が逮捕された。幹部は、起訴されたものの裁判の過程でずさんな捜査が判明し、無罪判決を受ける。

判決後、こともあろうに、大阪地検の押収した資料を担当検事が改ざんしたことが朝日新聞のスクープで明らかになる。担当検事のほか、当時の上司の部長、副部长などが次々と逮捕され、絶大な権力を掌握する検察当局の前代未聞の不祥事が表面化した。

調査報道の一般的な定義は、官庁、地方自治体、企業など当局の発表、リークなどに頼らずに、取材する側が主体性、継続性をもって情報を積み上げ、当局の不祥事などの新事実を突き止めていこうとする手法である。

大阪地検特捜部の不祥事のケースだと、取材中の敏腕記者が、「検事が証拠を改ざんしたらしい」との情報を入手、これをベースに複数の関係者に当たり、確認。取材を通じて確度を高めてスクープしたわけである。事件の性格上、当局が自らの存在意義を危うくさせかねない不祥事を発表する可能性は極めて低い。朝日新聞の報道がなければ、事件は永久に闇に葬られていただろう。調査報道の醍醐味は、そこにあると言っても過言ではない。

発掘型のこうした調査報道は、ジャーナリズムの歴史を紐解けば、少なくない。古くは、戦後間もない頃に共同通信記者が暴いた警察当局による自作自演の駐在所爆破事件「菅生事件」。当時、勢いを増していた共産党を弾圧するための権力の犯罪である。金権腐敗政治の先祖の田中角栄内閣を退陣に追い込んだ1970年代のジャーナリスト立花隆による政治資金の錬金術の解明「田中角栄研究」や、やはり竹下登内閣を退陣の追い込んだ1980年代の朝日新聞による不正資金の究明「リクルート事件」もそうだった。最近では、2004年度新聞協会賞に輝いた北海道新聞による北海道警察本部の裏金の解明などがある。警察の裏金事件は、北海道新聞の報道に先立って高知新聞がスクープ、これを端緒に各地の地元紙が暴いている。いずれもメディアの報道がなければ表面化しない権力の犯罪である。警察の裏金は、報道後、スクープした地方紙を狙い撃ちした取材拒否などによる情報遮断という悪辣な報復に警察は出た。反省の態度さえ見せておらず、腐った内部の実態が明らかになっている。

世界的な視点から眺めると調査報道の重要性が戦後、メディア界で指摘されたのは、大統領の犯罪といわれた1960年代の米ウォーターゲート事件である。これは、若きワシントン・ポストの2人の記者が当局の中傷、取材拒否など一連の弾圧行為にもめげずに丹念な取材を重ねて大統領の政治スキャンダルを追及、最終的には当時のニクソン大統領を辞任に追い込

んだ画期的な報道である。この手法は、当時、「investigative reporting」と呼ばれ、日本では、「調査的報道」、最近は、「調査報道」と呼ばれるようになった。

その重要性がここ数年で叫ばれるようになったのは、大きく分けると3つほどの理由がある。①インターネット時代への突入で速報性で新聞はネットメディアに勝てなくなった②記者クラブ問題を通じて記者と当局の癒着、閉鎖性が明らかになり新聞・放送など旧来メディアに対する信頼性が低下③当局の発表に力点を置いた報道への批判—などだろう。

ネット時代への突入は、フリー（無料の）時代への突入でもあった。ウェブサイトを経由し、多くのものが無料で入手できる。これは、ニュースを含めた情報一般でもそうだ。マスコミの発信するニュースや記事が無料で閲覧できることから20代を中心に新聞、雑誌など紙媒体を購入する読者が激減している。新聞などの従来型メディアの経営が苦境に陥っているゆえんである。

新聞に掲載される記事について、日本のメディアは事件や事象の発生に力点を置いてきた。それが朝刊、夕刊の形で読者の下に届くのである。ところが、ネット上には、リアルタイムで事件、事象の発生を伝える情報が飛び交う。このため事件の発生を伝える新聞記事はネットより格段に遅く読者に届くことになる。読者は自然と事件の発生を確認する手段として新聞に興味を示さなくなった。新聞が売れないわけである。

では、新聞はどうするか。記事の独自性を出し、ネットと差別化するには、記者が取材力を駆使し、いわゆる、足で稼いだ情報を掲載して自らの優位性、違いを示さなければならない。ここに浮上したのが、本論文が扱う調査報道、ジャーナリズムの本来の任務、権力の監視機能を発揮できると言われながらも日本では実質が伴わないでいた取材手法だったのである。記者の蓄積や取材力、歴史観などオールラウンドの力がまさに問われるのである。

こうした流れを受けて、最近、調査報道関連の出版が相次いでいる。「朝日新聞の危機と『調査報道』」（同時代社、2012年）、「権力VS調査報道」（旬報社、2011年）、「調査報道がジャーナリズムを変える」（花伝社、2011年）など。調査報道のタイトルこそないが、2011年度の新聞協会賞に輝いた朝日新聞のスクープの舞台裏を綴った「証拠改竄」（朝日新聞出版、2011年）や、やはり2012年の新聞協会賞に輝いた福島原発関連の朝日新聞の連載記事をまとめた「プロメテウスの罠」（学研パブリッシング、2012年）なども含まれるだろう。

2011年3月に東北地方を中心に東日本を襲った東日本大震災の際にも調査報道が話題になった。反面教師の側面が強いが、震災に伴う東京電力福島原子力発電所の爆発事故で、日本のメディアは、東京電力、原子力安全・保安院、菅内閣の会見をそのまま報道するだけで、「本当のことを説明していないのでは」との懸念が市民の間に強まったのは記憶に新しい。大災害につながる炉心溶融（メルトダウン）についても、当初から発生しているのにもかかわらず、当局の発表を検証することなく、そのまま「(燃料棒に) 損傷の疑い」との報道を続けた。では、メルトダウンはなかったのか。そうではない、当局は約2か月後にやっと認め、旧来メディアは、それに沿って報道した。読者が情報隠しのため当局と癒着していたのではと疑っ

たのは当然のことである。

このいきさつについてニューヨーク・タイムズ紙の東京支局長マーティン・ファクラーは、自著の『『本当のこと』を伝えない日本の新聞』（双葉新書）の中で、「ニュースをNHK、民放、通信社などすべての中央メディアが横並びで報道していた。関係機関の発表を検証せずにそのまま報じることが国民にとって何か利益になるといえるのだろうか」と疑問を投げかけている。

メディアの役割のひとつとして、権力を監視する番犬機能がある。ファクラーは、これではメディアは、「官僚制度の番犬」ではないかと憂慮しているのである。要は、当局の発表を自分でチェックし、読者に伝えること、ジャーナリストによる検証が欠けている、つまり調査報道が重要ではないかという指摘である。

では、日本のジャーナリズムがすべて当局の発表をそのまま伝える震災報道だったのかというところでもない。ファクラーも、琉球新報、沖縄タイムス、高知新聞、神戸新聞、愛媛新聞などの地方紙が独自情報を発信したと指摘。震災以降、脱原発を主張し、独自路線の記事を展開する東京新聞についても高く評価している。ネット時代入りで、世界のどこからでもウェブサイトアクセスできるようになった。「地方紙こそチャンス」の時代に突入したというのである。ファクラーは、英語で世界に発信する記事こそ地方紙にとって大事だと力説している。

調査報道はこれからメディアが独自色を出し、ネット時代を生き残るためにもとても重要な手法であることが分かるだろう。そして、この論文では、そのルーツとそれを手掛けたジャーナリストたちの生きざまを探るのがテーマである。論文の第1弾で紹介したように、そのルーツは、アイダ・ターベルに遡る。今回は、ターベルの、雑誌社に入社したニューヨークの“駆け出し”時代を探ろう。

2. ナポレオン伝ーニューヨークの1890年代

1) 緊急呼び出し

1894年6月ターベルは、パリから戻ってきた。家族との生活から長期間にわたり隔絶されたターベルは、家族の下へ無性に帰りたかったようである。帰国の旅費は、ニューヨークのマクルアー入社を条件に工面してもらった。船便の2等運賃の代金を送ってくれたが実際は3等で帰国した。浮いた差額で、姪が欲しがっていた磁器製のフランス人形などのお土産を購入した。帰国後は、鉄道を乗り継ぎ、父母と兄弟や甥や姪の住んでいる故郷タイタスビルへ直行した。3年ぶりの帰国で大歓迎を受けたのはもちろんである。

父、母、弟、妹などの一族郎党が集まって、かつてのようにピクニックに出かけた。誕生日を祝い、父の提案でサーカスにも行った。そんな日々が続いていた2か月後、ニューヨー

ク在住のマクルアーから突然、電報が舞い込んだ。「直ちにニューヨークの事務所へ顔を出すように」との指令であった。

当初の予定では、10月にニューヨークに出社し、青少年部門の編集者になるはずだった。だが、フランスの英雄、ナポレオン・ボナパルトの伝記の執筆を依頼されたのである。それも11月からの掲載である。あと2か月超しかない。

ターベルにとってマクルアーからの要請は、実は、“渡りに船”であった。なぜなら、家族こそ、大歓迎で迎えてくれたものの、居心地の良いものでは必ずしもなかったからである。

近所の人達から欧州帰りということで、あれこれ無理を押し付けられたようだ。「アイダ・ターベル」の著者のキャサリン・ブレイディーは、「米国では、当時、特に、女性は、欧州より勝っている」と考えていたから、と説明している。女性の地位は米国が上ということで押しつけた難題をターベルが上手く処理できないのを見て、住民は満足していたということだろうか。

さらには、93年に米国を襲った恐慌が追い打ちを掛けた。銀行、企業の倒産が続出、農業恐慌も加わって全土が厳しい状況に追い込まれていた。オイルビジネスを手掛けるターベル一家も例外ではなく、経済的に苦境に追い込まれていた。帝王ロックフェラーは、これに乗じて、タイタスビルの石油産業を根こそぎ手中に収めようと画策していた。採算度外視の値段で販売し、ライバルの中小企業を廃業に追い込む手法の洗礼を、ターベルの父親も受けていた。ロックフェラーは、当時原油価格が2倍に上昇したのにもかかわらず、販売価格は据え置いていたのである。

父とともにオイルビジネスにかかわっていた弟のウィルは、ロックフェラーの兵糧攻めを乗り切るため、ドイツへの製品の輸出を画策していた。家の雰囲気は、張りつめており、ターベルは息苦しさを感じていた。自分がこの家には負担になると常々思っていたのである。

フランスへの恋しさが募っていたターベルは、NYへ行って働けば、家計を助けることができるし、訪仏の資金も貯められると考えていた。荷造りを終えたターベルは、切符を握りしめて一路、鉄道でニューヨークへ向かった。

それにしても、なぜ、マクルアーは、ターベルにナポレオンの伝記の執筆を依頼してきたのか。それは、1890年代、フランスがナポレオンの勝利100周年記念に沸き立っていたことと関係がある。そうした動きは、大西洋を隔てたニューヨークのマクルアーの編集部にも伝わっていた。米国では、これを「Napoleon Movement」と呼んでいた。フランスを含めた欧州からの移民が相次ぐ米国にとっては、これは気になる文化運動であった。

マクルアーには、ナポレオンの肖像画や手紙などの遺品を大量に収集したワシントン在住の友人がおり、この人物は伝記を出版するのであれば、提供しても良いと申し出ていたのである。マクルアーは、フランスでもなかなかお目にかかれないようなこうした肖像画や遺品を満載した本を出せば、絶対に当たるとみた。要するに、一儲けをたくらんでいたのである。

ターベルに白羽の矢が立ったのは、3年のパリ留学から帰国したばかりのフランス通で、

「ナポレオンを知り尽くした女性ジャーナリスト」と宣伝できると踏んだからでもある。

筆も立つし、取材力もある。では、ターベルはどうだったのかというと、確かにフランスには滞在した。だが、ナポレオンの伝記を書けるほどの豊富な知識は持ち合わせていなかった。だから、伝記執筆のための情報収集でフランスに渡り、仏国会図書館などで材料を集め、それを基に当然書き始めるのだと考えていたのである。念頭には、3年のフランス留学中にロラン夫人の伝記の材料を集めた手法があった。これを応用すれば、可能だと考えていた。

ワシントン在住のナポレオンの遺品の収集家は、引退した法律家のガーディナー・グリーン・ハバードであった。ハバードは、電話の発明で知られるアレキサンダー・グラハム・ベル設立のベル電話会社の後ろ盾でもあった。娘がベルの妻でもあったからである。

実は、マクルアーは、伝記の執筆を当初、詩人のワーズワースの孫であるロバート・シェラードに依頼していた。だが、フランスと敵対する英国出身だったためなのか、反ナポレオンの内容だったため、遺品の掲載条件として①正確さ②説得力がある③バランスが取れた一を挙げていたハバードを怒らせる結果となり、執筆者の交代が決定した。11月には第1回目の記事を掲載する段取りだった。それまでの時間はほとんどない。急ぎよ浮上したのがターベルであった。

仏留学時代からターベルは、科学者パスツールの記事や仏流行作家のインタビュー・シリーズをマクルアー誌に寄せていた。その筆力や取材力に脱帽したマクルアーが、パリの下宿を急襲し、編集陣入りを口説き落とした経緯がある。

話がまとまると、ターベルは直ちにワシントンへ派遣された。もちろん、遺品収集家のハバードに会うためである。折しも、約100周年に当たり、収集物を、個人のものとして眠らせるのではなくて、公けのために提供しなければならないと感じていた。このためマクルアーに提供を申し出たのである。

幸運なことに、仏留学中にターベルはこのナポレオン運動を夕刊紙のフィガロなどで目にしていた。1892、93年の頃の話である。どちらかという政治運動とみていた。無政府主義者などの台頭で、街角では爆弾騒ぎも起きており、フランス国家への求心力を蘇らせるために皇帝ナポレオンの栄光を利用した政治的な側面もあると睨んでいたのである。

だから、ターベルにとって、この執筆はやや抵抗があった。自らの自伝「All in the Day's work」で、「ナポレオン・ボナパルトの人生を書く。それはお笑い草だった。けれども、どうやって拒否できようか」とその心中を吐露している。

ターベルは、自分を納得させるために視点を変えて考えてみた。ナポレオンは、ロラン夫人が断頭台に消えた革命の泥沼の混乱の中から国家を救い、礼儀、秩序、常識を蘇らせた英雄ではないか。仏革命という大きな流れの中で歴史をみればナポレオンの分析も悪くない。こんな風に考えたのである。

ターベルにとってマクルアーの編集陣に加わることはどういう意味があったのだろうか。マクルアーは、入社後に週給40ドルの給与を保障していた。これは予想外の大きな収入で

あった。仏革命史に自分を捧げたいとマクルアーに話をしていたから、それに関連した記事も書けると期待していた。取材力を付け、筆力のアップも可能である。生活費を節約して貯金すれば再びフランスへ行ける、と考えていたのである。

2) ハバードとの出会い

「やってみましょう」ターベルは、マクルアーの誘いに応じた。もちろん、パリへ行き、関連の情報収集が必要なことも付け加えた。ただし、マクルアーの口から出たのは、ハバードの膨大な収集物をまず見て欲しい、という言葉であった。もちろん、パリ行きも検討することになっていた。それは、ワシントン訪問後である。

ワシントン行きを決断したのと前後してハバードから夏の別荘に直ちに顔を出すよう求める招待状が来た。調べてみると、そこは、ワシントンのロック・クリーク動物園の近郊で、当時の大統領のクリーブランドやフィリピン戦争の英雄ドウエイ司令官なども別荘を構える、ワシントン地区で最高ともいわれる高級保養地であった。

会ってみると、ハバード夫婦は、存外素敵な人達であった。一流の人物の別荘らしく、メイド、バトラー（執事）、庭師などがいる大きな家に住んでいた。70歳くらいにみえた。逞しく、エネルギーが傑出していた。友人や家族、夫人など周りの人たちへの気遣いが素晴らしい人だった。

夫人は、教養やセンスに恵まれていた。服装などにあまり気を使わないターベルに対しても驚くほど寛容だった。ターベルは、この夫婦の社交を軸とした予想外の素晴らしい執筆生活を送ることになる。

情報収集活動を開始すると、予想とは裏腹に、執筆のための材料が山のように埋まっていることが短期間で分かった。情報の山積する街なのである。ターベルは、腰を落ち着けて調査・取材活動に入ることを決断、時代感覚にあふれる街との評判の高いデュボン・サークルに居を構えて本格的な取材活動を開始した。

ハバードは、ナポレオン本人、家族、友人らの肖像画から関連の最新の本、パンフレットまで幅広く所蔵していた。回顧録をパリから取り寄せたりしていた。ターベルは、仏政府の命により出版されたナポレオンの手紙など通信文書の全量が国務省に保管されていることも発見。ナポレオン時代の仏主要紙がバックナンバーを含めて読めることも分かった。

議会の図書館は、これまた凄かった。1779-81年の当時の、ドイツ公使アンドリュウ・ホワイトが収集した驚くべき量のナポレオン関連の英独仏語の文献が眠っていた。50巻に上る英仏語などによるパンフレットなども所蔵されていたのである。

米政府がかき集めたこうした情報に接し、いずれも記事に利用できることが分かるにつれてターベルは、パリに行く必要性が次第に薄れていくのを感じていた。ターベルはフランス語に堪能だったから、仏語で書かれたこうした生の情報も利用できたのである。

ロラン夫人伝を書いたときのようにターベルは、まず、議会の図書館に籠った。他の利用

者の迷惑にならないように、隅の机を利用した。19世紀当時、一般の利用者のために使える机はなかった。情報収集のための図書館通いが続く。床から積みあげた本は、天井にも届くようになった。最終的には専用の部屋があてがわれることになる。

この頃は、コピー機もない時代。第二次世界大戦前に書かれたターベルの自伝には、特に記述はないが、必要な部分はすべてノートに書き写したと推定される。

6週間後にナポレオン特集の第1回目が完成した。記事には、自分の経歴を載せた。それがとても生意気に思えた。週給40ドル以上の事は望んでいなかったし、英雄の最後となる1793年のセントヘレナ島への流刑までのスリングなドラマを追うのに精一杯だったのである。

第1回目の原稿に目を通したハーバードの評価は好意的だった。読者の評判も悪くはなかった。雑誌が本屋に並び、ターベルがナポレオン伝を手掛けていることが全米に知られるようになると、ナポレオン通で知られる著名人達から声が寄せられた。

その筆頭が、ジョン・ロープで、「自分の収集物を見せるからボストンに来ないか」との招きを受ける。ナポレオンの末裔からも誘いがあった。ナポレオンの五男のジェローム・ナポレオンのひ孫のチャールズ・ボナパルトからである。「自分のコレクションをみるためハーバードと一緒にボルチモアに来ないか」と誘ってくれた。米富豪の娘と結婚したこともあるジェロームの末裔が、米国に住んでいたのである。

自伝では、「会ってみると、無意識に後ろに手を組み、少しばかり身をかがめて立って話すチャールズの仕草が、ナポレオンはこうだっただろうと思わせる雰囲気があった」と記している。

ターベルの手によるタイトル「A short life of Napoleon(ナポレオンの短い人生)」の伝記と頃を同じくして、ライバルのセンチュリー誌でも同様の連載が始まった。数年を費やしたウィリアム・ミリガン・スローン教授が執筆した本格的な伝記でタイトルこそ同じだったが、中身はかなり異なっていた。ハーバードが保有していた門外不出の肖像画などの写真を多数盛り込んだマクルアーズ誌の方が読者の購買意欲をそそった。それにターベルの足で稼いだ材料を盛り込んだ記事を加えて出版されたわけである。

現代風にいえば、写真や絵などを多用する出版界でキーワードとされる、いわゆるビジュアル化を徹底させた記事だった。このため評判は上々で、スタート時に2万4500部だった部数が数カ月後には、6万5000部にまで伸びた。連載が終わる頃には10万部にまで膨れ上がっていた。雑誌には、ナポレオン伝以外の著名な米作家による短編があったのだが、ターベルの作品の人気が高かったのは紛れもない事実だった。

多くの米新聞が賞賛してくれた。ニューヨーク・プレス紙は、「これまでのナポレオン伝の中で最高」といった具合である。

嬉しかったのは、ターベルが執筆のため最後に取材し、競作となった著者のスローン教授が一定の評価をしてくれたことである。教授は、ターベルのナポレオン伝に対し、「好奇心

を満足させるため、あちこち駆けずり回り、楽しみながらも疑いを持ち、あれこれ考えながら、全時間を費やした貴女は、伝記の価値と健全性に貢献した。私もしばしば、あなたのようにできたらと思った」「締め切り前に原稿を書かなければならなかったし、それができなかった。貴女は、living sketch という手法で大きなものを得た」と喜んでくれた。教授がスケッチという表現でほめてくれたのは、ありのままの姿を読者に届けたいという気持ちで書いたターベルにとっては望外の喜びだったようだ。

3) 正確な記事

ナポレオン伝に絡む興味深い思い出をターベルは自伝の「All in the Day's Work」の中で綴っている。それは、オーナーのS.S.マクルアーとの関連の話である。

情報収集を続ける中でターベルは、パリのアンバリッドにあるナポレオンの霊廟が、埋葬後に一度だけ開けられたとの話を聞き込んだ。盗掘され、ナポレオンは、もはやそこには眠っていないという噂が流布し、その末裔である当時の皇帝が、この確認のため深夜に開けてみたというのである。

念の入ったことに、この作業に加わった友人らに、かん口令を引き、後年、これが発覚して、問題が生じた最悪のケースに備えて誓約書も作成した、というのである。だが、その後、皇帝は失脚し、この約束は無意味になったという尾ひれがついていた。ナポレオンの亡骸は、もちろん、そのままだったという。

好奇心旺盛なマクルアーは、ターベルに対し、それを記事に直ちにするように指示。ターベルは、それが単なる噂に過ぎず、その可能性は薄いと力説した。これに対し、マクルアーは、「何と残念な。君はナポレオンのことを何も知らないね」と食ってかかり、結局、マクルアーの指示で、原稿だけは書かされた。

ねつ造された話が雑誌に掲載されることを心配したターベルの立場を配慮してマクルアーは、さらなる検証が必要だと約束した。この時期にたまたま欧州を訪れたマクルアーはパリに行き、数週間後、自分の手でこの噂を調査した結果を葉書で伝えてきた。

文面は、「ナポレオンの墓を開けた話は掲載するな。開けられていない」という素っ気ないものだった。記事は、結局、日の目を見ずに終わった。正確性を重んじるターベルそしてマクルアーならでは、逸話と言えようか。

この頃の米国と言えば、イエロー・ジャーナリズムが一世を風靡していた時代である。部数拡大が最優先で、正確さよりもその記事が大衆の興味をそそるかに重点が置かれた。ちょっとした出来事を大げさに書きまくる、針小棒大な記事も少なくなく、センセーショナルな記事が横行した。

良く知られているのは、米西戦争での新聞王同志の戦いである。ピューリッツァーとハーストは、この戦争を部数拡大の千載一隅のチャンスとしてねつ造報道に血道をあげた。当時スペイン領だったキューバのハバナ港に停泊していた米戦艦の沈没の原因を根拠もなく、「ス

ペイン軍の仕業」と断定的に報道した。現場に派遣した記者たちに対しハーストが「君たちは記事を書け、私は戦争を作る」と激励したことがまことしやかに伝えられている。もちろん、ハースト自身は、これを否定している。

ニューヨークの二大新聞が激突し、扇情的な報道を続けたことに対し当時のニューヨーク・タイムズ紙は、こうしたイエロー・ジャーナリズム路線を手厳しく批判、大衆の反感も高まった。ピューリッツァーは、米西戦争終了後は、行きすぎた路線を深く反省し、その後は、こうした手法は鎮静化した。英語のあまりできない移民がこの頃多かったため難解な記事ではなく、写真や漫画、イラストが紙面を埋め尽くす分かり易い英文の紙面の方が好まれたという背景もあるのだろう。

こうしたあまりにもやり過ぎの報道を憂慮していたターベル、編集担当のフィリップ、そしてマクラーは、ねつ造報道を「一種の病気」と敵視していた。

競作となったナポレオン伝の売れ行きと評判が好調で、知名度が上がったことは、ターベルに副次的な効果をもたらした。パリの留学時代に書きあげたものの出版社が現れず、お蔵入りになっていた自信の処女作「ロラン夫人」が、サブスクライバー誌に掲載となったのである。さらには、単行本としても上梓した。ナポレオン伝の成功で知名度が上がったためである。

4) A short life of Napoleon Bonaparte

それでは、ナポレオン伝とはどんな内容だったのか。筆者は、米国から取り寄せてみた。当時の本をそのままコピーして出版したものである。

厚さ1センチ強の伝記をめくって驚いたのは写真、肖像画、絵画、イラストがあまりにも多いことである。当時の技術の限界から白黒による印刷ではあるが、大小合わせれば、248ページの全ページにわたって1ページごとに少なくとも1枚の写真が収められている。写真集かと言えば、そうではない。写真だけのページもあるが、基本は、記事と関連して写真がついている。

表紙をめくった次のページには、本のタイトルの文字の下に「ガーディナー・G.・ハーバード閣下、ビクター・ナポレオン、ロランド・ナポレオン、ラリー男爵、その他のご厚意で提供された250の挿絵入り」との文章が掲載されている。

最初に登場するのは、フランスの当時の人気画家ジャン・バプティスト・グルーズによる肖像画で、キャプションは、「22歳のボナパルト」。現物は、油絵と思われる。ネット上で検索すると、カラーの現物画を楽しめる。残念ながら、19世紀の技術では、白黒印刷である。

画家グルーズの特徴は、人物の目の書き方に凝縮されている。この肖像画の目も一連の作品と同様大きく描かれている。勲章などのけばけばしい装飾は一切身にまともわず、ふっくらとした頬のお坊ちゃま風の青年が何か遠くを眺めている構図である。22歳のナポレオンの雰囲気伝える絶妙なスケッチといえるだろう。

肖像画のキャプションには、17世紀中葉、王室関係の建設、各種工芸品や装飾の振興や人材育成のためルイ14世によって設立されたパリ国立高等美術学校が1893年に開いた「世紀の肖像画の展覧会」で展示されたナポレオンの青年時代の姿を伝える珍しい肖像画などとの説明が付いている。同学校は、セヌ川を挟んでルーブル美術館の対岸に建てられたフランス最高峰の美術学校。隣には、ボナパルト通りが位置する。

次のページは、序文が書かれている。1894年10月との日付が入っており250枚の肖像画、彫刻、絵画などの提供先をさらに詳しく記述している。

後半には、肖像画、彫刻などナポレオンの収集物の多くを所有するハーバードが雑誌のオーナーであるS.S.マクラーに宛てた手紙が掲載されている。

内容は、自分が14年前からこうした収集を続けていること。ナポレオン本人のほか家族の関連で、その数は、200-300。最初の肖像画は、22歳の時の1791年に描かれ、その次は、5年後の1796年、死亡直後には4枚描かれたなどと綴っている。

ハーバードは、ナポレオンの人生を①將軍②政治家、立法者③皇帝④転落と衰退-の4つの時期に分け、それぞれの時代の肖像画などを描いた画家の名前を列挙、入手先なども挙げている。

その次が目次。22章に分かれて、例えば、第1章は、幼年、青春期の環境-ブリエンヌの学校時代、第2章、パリ時代-砲兵士官-著作物-革命、第3章、ロベスピエール-予備役-最初の成功・・・など。ナポレオンは、フランス革命のジャコバン派のリーダーで、独裁権の掌握後は、ロラン夫人などの反対派を次々と断頭台に送る恐怖政治を断行したロベスピエールの弟と繋がりがあり、ロベスピエール失脚後は、一時軍務から外されるなど冷や飯を食っていたことがある。この時代を取り上げたわけである。

第21章は、エルバ島-100日-2度目の退位、第22章、英国に降伏-セントヘレナ島-死、第22章、2度目の埋葬、ナポレオンの家系、ナポレオンの人生の歴史、などと続いている。

冒頭で説明したように、ターベルのナポレオン伝の最大の特徴は、250枚にも上る肖像画、手紙、挿絵である。恋多き女として知られるジョセフィーヌなどの肖像画も盛り込まれている。競作となったスローン教授の作品が同時に別の雑誌に上梓されたのにもかかわらず好調な売れ行きだったのは、このビジュアル化が功を奏したためである。

なにしろ、当時は、テレビはもちろんラジオもなかった時代。街角のお店で、のぞき窓から動画が楽しめるエジソンのキネトスコープが登場した頃である。写真集というほどではないが、欧州で流行しているナポレオン100周年に関心を抱いた当時の米市民の関心を集め、購買意欲をそそったのは分かるような気がする。

緻密な取材で知られるターベルが自伝で「粗製乱造」と表現しているように、ナポレオン伝は、政府の文書や図書館などの公的機関の公開情報を基に短期間で書き上げた作品である。中身は、それまで公表された文献、新聞、雑誌などをベースに書いた正統派的な内容であるが、それ以上のものではないといえるだろう。

3. リンカーン伝—フランスとの決別

1) 取材拒否

半年続いた連載の終了間際に近づくマクルアーから次のテーマの打診があった。今度は、執筆ではなく編集である。マクルアーは、著名人へ執筆を依頼し、その原稿を雑誌に掲載することを当初考えていたようである。

その人物は、米国で最も評価されている大統領のうちの一人、奴隷解放の偉業を成し遂げたものの直後に、狂人の銃弾に倒れた悲劇のアブラハム・リンカーン伝である。米国民に歴代大統領の中で最も偉大な大統領は誰かと問うとトップ3傑の中に必ず挙がる人物である。

熱狂的な信奉者であるマクルアーは、「リンカーンをやらなければ偉大な雑誌ではない。わか雑誌は、南北戦争以降の最も重要な要素を俯瞰してきた。アブラハム・リンカーンの人生と個性もそうである」と強調した。

ひよんなぎっかけから記事をパリから寄稿するようになり、その結果、本社採用となったターベルは、この申し出に、不安を募らせていた。編集記者の仕事をはじめたターベルの関心事は、依然、フランス革命と女性問題、革命を通じて女性問題を紐解くことにあった。高校時代から興味の対象であった顕微鏡を使った生命の観察、その不思議さの解明もその中にあった。ダーウィンの進化論が宗教界の反発を呼び、学界などでも議論となっていた。生命の解明はとりもなおさず、神の解明でもあった。

「米国の歴史へひとたび足を踏み入れれば、それは、フランスの終わりを意味する。そして、女性問題などを解明するという決意の終了でもある」と当時の気持ちを自伝で語っている。ただし、深刻に考え過ぎなのかもしれない、との気持ちもあった。それは、破格の5000ドルの年俸を約束されていたからである。当時の工場の女性労働者、メイド、料理人の給与が週5ドルを超えるのはほとんどなかった。5000ドルは、相当の高給だったのである。タイタスビルの家族の家計が火の車であることもあって、我を通すわけにはいかなかった。

リンカーンが凶弾に倒れたのは、1865年4月。わずか30年前のことであり、大統領とともに選挙戦を戦った参謀や政治家、知人、その支持者達はもちろん、家族達も存命中であった。

確かに、リンカーンの当時の秘書であったニコレイやヘイらがリンカーン伝を既に出版、高い評価を得ていた。だが、マクルアーは、2人が本に書かなかった個人的な逸話があるはずだし、当時の閣僚、議会の政治家、主要各紙の編集長、例えば、奴隷制廃止の急先鋒でリンカーンを熱心に支持したシカゴ・トリビューンのジョセフ・メディルなどに当たれば何か出てくるはずだ。こう主張して利かなかった。

ターベルは、まず、61年からリンカーンの暗殺時まで私設秘書を務めていたジョン・ニコレイと連絡を取ってみることにした。運よくニコレイは、ワシントンの文学関係の学会に娘

と顔を出しており、ここで声を掛けてみた。ニコレイから返ってきたのは、「何もない」という冷淡な対応だった。演説や手紙についても、10巻に渡る長編の伝記と一緒に執筆したジョン・ヘイを含めて残っていないという。「無謀な企てを試みるのは辞めた方が良い」とアドバイスしてくれた。

協力を得られないため、ターベルは独力で調査を開始、その結果が「リンカーンの人生」として雑誌に掲載され、新しいリンカーン像が形成され始めるとニコレイは、自分の下へ抗議にやってきた。「あなたは私の領域に侵入している。あなたは、通俗的なリンカーンの人生を書いている。そして、私の所有物の価値を下げているだけである」と言い張った。

ターベルは大いに落胆したが、「それは間違っている」「私のリンカーン伝を読んで、興味を持たば、貴方のリンカーン伝の読者が増えるのである」と反論した。だが、ニコレイは、聞く耳も持たずそのまま姿を消した。

ニコレイから協力を拒否されたことで、ターベルは、リンカーンの人生の最初、つまりその出身地であるケンタッキー州での貧しく無名の時代からの情報収集を始めることにした。

米ケンタッキー州ララーの農場の丸太小屋で生まれたリンカーンは、エイブとの愛称で呼ばれ日本では、「正直エイブ」、「偉大な解放者」、「奴隷解放の父」とも呼ばれ、南北戦争終結直後に暗殺されたという程度の知識だけでそれ以上のことはあまり知られることがない。

生い立ちは、順風満帆というよりは、不遇と言った方が適切であろう。農夫の父は、裕福ではなかった。祖父に当たるアブラハム・リンカーンは、1796年インディアンの襲撃に会い、幼かった当時の父ら子供たちの目の前で惨殺された。リンカーンの名前は、この祖父の名前にちなんでつけられたのである。黒人奴隷に対しては慈悲深いほどの理解を示したのに対し、インディアンに対しては手のひらを返したように厳しく、無慈悲、冷酷な対応を取り続けた。西部への開拓途上で、リンカーンが民族浄化ともいえる大量虐殺を指揮したのはこの影響が残っていたのかもしれない。

地区の陪審員になり、広大な農場を保有するまでになった父は一時裕福な暮らしをしていた。だが、訴訟に負けて、土地などをすべて喪失。インディアナ州へ急ぎょ移ったことが知られている。

ターベルは、裁判所の資料や地域史、新聞などを手当たり次第にあさり、情報収集を始めた。知人を探し、マクルアーが小躍りするような、リンカーンにまつわる何か凄いのを誰かが持っていないか、探し続けた。ターベルは、それまで米国史には無関心だったからこれはほとんどギャンブルのようなものであった。

95年2月、ナポレオン伝の原稿がまだ残っているのにもかかわらずターベルは、1か月の予備的な調査に入る。ケッタッキーの厳しい冬の寒さを知っているマクルアーは、旅の前にベッドの中ではなく就寝用の靴下をターベルにプレゼントした。ルイスビルからスタートした。だが、いざ動いてみると絵画にしても手紙にしても驚くべきような遺品はほとんどなかった。がっかりしたターベルだった。

2) 息子のロバート

そうこうするうちにビッグチャンスが巡ってきた。ナポレオン伝の執筆の関連で、ワシントンで知り合ったシカゴ在住の女性が幸運を運んできた。それは、エミリー・リオンズ夫人であった。夫が、金持ちの階級だったこともあって人脈は驚くほど広く、実にいろんな人を知っていた。

ターベルが雑誌に掲載する門外不出のリンカーンの新しい遺品を探していることを知ると夫人は「シカゴに来なさい。(息子の)ロバート・リンカーンに会わせてあげましょう。私がお願ひすれば、ロバートは、何か(遺品を)くれるでしょう」と言い放った。

実現すれば、それに越したことはないのだが・・・といぶかっていたターベルはシカゴへ足を伸ばした。すると、紆余曲折も何もなく、それが実現したのである。運の良さは相変わらずだ。

ターベルとロバートとの面談は夫人の家で実現した。ティーカップに紅茶を並々と注いだ夫人は、「さあ、ロバート、何か価値のある凄いものをターベルさんに差し上げてくれないかしら」とお願いしてくれた。

「エミリーさんがおっしゃるのであればもちろん」ロバートは微笑みながら、応えてくれた。

ただし、同僚の弁護士事務所にあった父の資料の多くは、盗まれた。大統領時代の資料は、ニコレイとヘイの著作でほとんど使われてしまった。「力になれることは少ない」とも語っていた。

ターベルにとっては、息子と紅茶を飲めるさえも信じられないことなのに、秘蔵品を手にすることができたのである。それは何だったのか。ロバートは、門外不出の父リンカーンの30代の頃の銀板写真を提供してくれた。

初めて見た時、ターベルは、息を飲んだ。それまで知られていたあごひげを蓄え、ほおが骨ざり、厳格な印象の、あのリンカーンとは別の姿だったのである。ターベルは、この写真を見れば、それまで流布していた若き日々の、野卑で、粗野で、見苦しいとの伝説を打ち砕くことができると確信した。この写真は、もちろん特集の第1ページ目を飾ったのである。この写真については、後段のリンカーン伝の項で説明する。

ターベルの自伝には、ロバートに会った時の様子が綴られている。以下が記述である。

「あまりにも信じられない出来事なのでメモさえも取れなかった。私は、類似点を見つけるためロバートの表情と態度をうかがった。何もなかった。ロバートは、丸々太った男でたぶん50歳くらい、散髪屋の椅子から出てきたばかりのように髪を小ざっぱりとした完璧な身だしなみ、世界の偉人に今会ってきたかのように海軍の提督のような落ち着きはらった威厳があり、それはすべて(母親方の)トッドの姿であった」。

雑誌に掲載されると、写真は大きな反響を呼んだ。プリンストン大学学長やニューヨーク州知事を務めた後に米大統領に選ばれたウッドロー・ウィルソンは、「いずれも際立った、

稀にみる素晴らしい写真」「夢見るような表情、悲しみのない打ち解けた顔つき」に感銘を受けたと語っている。

リンカーン伝の作家でもあるジョン・T・モースは、「数人の友人に人物の名前を告げずにこの写真を見せたら、ある人は詩人、別の友人は哲学者、あるいは思想家、エマーソンのようだと」「だからこそ、この写真は、リンカーンの自然な軌跡についての価値ある証拠なのである」と高く評価してくれた。

こんなこともあった。“足で稼ぐ”を信条とするターベルは、南北戦争中にリンカーンが英ビクトリア女王に対し、交戦相手の南部同盟を国として承認しないよう要請する書簡を書き、自分自身で送付したとの興味深い情報を入手した。関係先に確認を求めたのだが、反応はなかった。判然としない。思い余ってシカゴまで足を伸ばした。

ロバートは、丁寧に対応してくれた。ターベルが話を切り出した時こそ、厳しい表情だったが、直ぐに打ち解けて、満面の笑みを浮かべて話をしてくれた。

ロバートは、「もし父がその書簡を出し、当時の駐英米国公使のチャールズ・フランシス・アダムスがそれを知ったなら辞任していただろう。父は、政府間のすべてのやりとりは任命された外交官らによって遂行されるべきことをもちろん分っていた」と強調した。

そして、英宮廷での自分の体験談を笑いながら披露してくれた。ロバートは、パッチワークやキルト、菓、楽譜など、さまざまな種類の贈り物を女王から受けとっていた。朝食後、女王とアダムスは会って、タバコを一緒にふかしていた。お茶を理由に公使は、女王にいつでも会えたとし、2人ともそれを当然のことと考えていた。「大統領が直接女王に手紙を出してはならないという理由はないのだが・・・」と、ロバートは、涙が出るほど笑って説明してくれた。これで、一件落着である。

連載が終わるとターベルは、ロバートからの手紙を受け取った。中身はこうだった。「私は、貴女の粘り強い取材力の成果に対し、驚きと喜びを告白しなければならない。貴女の作品は、ニコレイとヘイが書いたリンカーン伝に欠かすことのできない、補完する作品であると考えております」と最大級の賛辞を送ってくれたのである。

リンカーンの長男のロバートの提供によるリンカーンの若かりし頃の写真は、雑誌の販売の大きなカギとなった。さらに、「私が持っているリンカーンからの手紙を是非掲載して」と声をかけてくれる一般市民もいた。いずれもニコレイとヘイのリンカーン伝には含まれておらず、裁判記録と同様、人気があった。連載は単行本化したが、その中の補遺には、約300のリンカーンのこれまで収録されたことのない手紙や演説を盛り込んだ。

演説のうちでもターベルが興味を持ったのは、奴隷制廃止が争点となったことで知られるリンカーン・ダグラス論争である。これは、58年に現職上院議員のスティーブン・ダグラス（民主党）と共和党から出馬したリンカーンの間で7回戦わされた討論会での論争である。リンカーンは、「米独立宣言は黒人にも適用される」と奴隷制廃止を主張、これに対しダグラスは、「奴隷制の存続は、住民の意思である」との論陣を張った。この上院選でリンカー

ンは敗北したものの、論争をその後、本にして出版、売れ行きは好調で、これがその後の大統領選で当選する道を切り開いたとの見方がある。

論争の第5回目の会場となったのが米イリノイ州のノックス・カレッジで、そのカレッジの学長が全米一若く、パリ留学前にターベルが編集を担当していた日刊紙デーリー・ヘラルド時代の友人ジョン・H・フィンリーであった。フィンリーの紹介でターベルは、論争についての当時の新聞記事を読むことができたし、演説会に出て討論を直接聞いた、という市民に会って当時の思い出を聞くことができた。フィンリーは、論争を記念する祝典を96年に企画し、リンカーンの長男のロバートが講演した。それは、ロバートの最初で最後のスピーチであった。

3) 失われた演説

リンカーンの本拠でもあったイリノイ州をターベルはしばしば訪れた。街の人々にリンカーンの話を是非聞きたいと水を向けると、「そうね、リンカーンの演説はどれもよかった。だけど、“Lost Speech(失われた演説)”ほどのものではなかった。“失われた演説”は、リンカーンの演説の中で最も素晴らしかった」と判で押したような返事が戻ってきた。

失われた演説とは何なのか。ネット上の百科事典ウィキペディアで検索すると確かに英文では出てくる。日本語で検索してもヒットしないのは、やはり、やや専門的過ぎるからなのであろう。それは、米イリノイ州ブルーミントンで56年5月29日に行われた演説である。演説会には新聞記者などが多数出席していたが、あまりにも感動的だったためにメモを取るのを忘れてしまい、即興だったこともあって演説は残っていない。中身は、奴隷解放に関連するものだとされている。

特ダネを狙うターベルは、この失われた演説について異様な関心を示す。そんなはずはない。誰かが間違いなく聞いており、それにまつわる秘話があるはずだし、聞けるはずだ。運が良ければ、誰かがメモを取って残っているかもしれない。そんな確信から取材を開始した。

その結果、米マサチューセッツ州の法律家で、メモを取っていた人物の存在を突き止めた。名前は、ヘンリー・C・ホイットニー。リンカーンと行動をよく伴にしていた。ホイットニーは、リンカーンの思い出を本にまとめたこともあった。

会ってみると、嬉しいことに、ホイットニーは、黄色に変色したその時のメモ帳を持っていた。聞いてみると、「演説を完全な形に起こそうとしたが、うまくいかないので諦めた」と釈明した。ターベルは、演説の重要性を何度も何度も説き、ホイットニーを説得、やっと演説の形にまとめてくれた。

興味深いことに、先に挙げたウィキペディアで検索した「失われた演説」の参考文献には、ターベルの自伝のほか、マクルアーズ誌が掲載されている。

ホイットニーのメモなどに基づく「失われた演説」が掲載されると今度はシカゴ・トリビューンの編集長のジョセフ・メディルから連絡が来た。失われた演説の場に自分は居て、

最前列の席にいた。だが、メモは取っていなかった、という。そして、ホイットニーによる演説がオリジナルに最も近いと絶賛してくれた。

メディルは、「ホイットニー氏は、驚くほどの正確さでリンカーンの演説を再現してくれた」、「それは、みずみずしい新鮮さで、40年前の素晴らしい演説を言葉と思想で思い出させるのに十分であった」とほめてくれた。

もともと、ターベルが苦労して突き止めた「失われた演説」の草稿は、イリノイ州以外では、評判は芳しくなかった。「失われた演説」は、失われたからこそ意義があるのであって、分かっただけならば何も意味がない。失われたからこそ、他の演説よりも重要性が増すのである。だから、「失われた演説」は、これからも「失われた演説」とする声が多かった。

自伝には、これ以外にも新しい発見が列挙されている。ひとつは、リンカーンの結婚式にまつわる話である。ターベルによると、当時、リンカーンは、妻のメアリー・トッドとの最初の結婚式に出席しなかったとの説があった。家族に質問すると、「それは作り話で、そんなことは絶対にない」と強硬に反論された。納得いかずに、リンカーン一家の仲間に聞くと、いずれも否定した。メアリー・リンカーンの姉妹は、その噂を上げた人物の実名を挙げて、他にもこんな出鱈目を吹聴していると非難した。このように、ターベルは、それまで固定化していたリンカーンにまつわるイメージや通説を自分の取材でチェックし、ひっくり返すことを楽しんでた。

では、部数はどうだったのか。門外不出の若きリンカーンの写真が掲載されるという前評判も手伝って、連載のスタートした号は、17万5000部の売れ行きとなった。その後は、25万部まで拡大した。ナポレオン伝のスタートの頃は、2万5000部だったことを思い起こせば10倍の売れ行きであった。

4) ターベルのリンカーン伝

4年を掛けたロングランの連載は、99年についに最終稿を迎える。リンカーンの長男のロバートが大いなる賛辞を送ったのは、既に説明した。リンカーン伝の中身は、一体どんなものだろうか。

筆者は、ネット上のアマゾンのサイトを通じて「The early life of Abraham Lincoln」、「The life of Abraham Lincoln Vo.1」、「The life of Abraham Lincoln Vo.4」、「In Lincoln's Chair」の4冊を購入した。もともと、ターベルのリンカーン伝は、これが全部ではない。

目を通して驚くのは、年代ごとのリンカーンの顔写真、肖像画、生家の丸太小屋の家の写真から始まって祖父の土地所有証明書、祖父の住んでいたケンタッキー州の家の地区のデッサン画、父の結婚証明書、リンカーンが最初にスタートした雑貨屋、リンカーンの使っていた椅子、バッグなど、とにかくありとあらゆるリンカーン関連の写真、データで埋め尽くされている。幼年時代の算数の計算問題を解くリンカーンの筆跡も掲載されている。

その手法は、ナポレオン伝と同様である。現代風に言えば、ビジュアル化の徹底に尽きる。

当時は、テレビもラジオもなかった時代、銀板写真は、あったけれど、高価だったし、現在のようにプリントもできない。写真は、一種高嶺の花だったのである。これが比較的安く入手できたのは、こうした雑誌を通じてだったのである。

240ページの「The early life of Abraham Lincoln」のうちのほとんどのページにこうした写真やイラスト、手紙などが掲載されている。リンカーンのファンは当然としてファンならずとも一冊は持ちたいと考えても不思議ではない。

それ以上に、この本の迫力は、最初のページに登場する若きリンカーンの銀板写真である。第一回目の特集連載時の1ページ目のこの写真を据えたというから相当の自信作ということだろう。ターベルは、撮影時のリンカーンの年齢を30代前半と推定している。脚注では、「現存するリンカーンの肖像写真よりも少なくとも6-7歳若い」とスクープ写真であることを強調している。

リンカーンは、60年に、大統領に是非なつて欲しいと切望する11歳の少女から「あなたの顔は、とても細いから、頬ひげをはやせばとても見栄えが良くなる。「女性はすべて頬ひげが好きだから、女性は、夫にあなたに投票するようせがむだろうし、そして大統領になれるでしょう」との手紙を受け取り、これを機に存在感を増すため、あごひげを生やし始めたということが知られている。

写真は、これ以前のもので、蝶ネクタイに三つ揃いの背広を着た、あごひげのない姿である。大きな目をかっと開き、口を、への字に結び、意志の強そうな風貌である。背広の袖から出た手の指がずんぐり太く、農夫を思わせる野性味のある写真である。あごひげのない分だけ、重々しさに欠ける。あごひげを生やしたことは成功だったといえるだろう。

では、世界のだれもが知っているあごひげを蓄えたリンカーンの写真がないかというところではない。目次のページを2枚めくると現れる。

興味深いのは、この240ページの本に掲載されている肖像写真・画の18枚のうちあごひげを生やしているのはわずかに3枚だけということである。あご髭は、60年10月、つまり、リンカーンが51歳の時から生やし始めたわけだから、26歳までを扱う今回の「The early life of Abraham Lincoln」には含まれなかったわけである。

この本の、目次を挙げてみよう。第1章、リンカーン家の系譜、第2章、アブラハム・リンカーンの誕生、第3章、リンカーン一家、ケンタッキーを離れる、第4章、教育との闘い、第5章、近所での文学的名声、第6章、インディアナ州でのリンカーンの楽しみ、第7章、インディアナ州への別れ、第8章、初仕事、第9章、ニューセイラムへ、第10章、サンガモンの有権者に対する初めての演説、という具合である。これが19章、アブラハム・リンカーン26歳になる、まで続いている。

以上の章立てから分かるようにターベルは、テーマごとに取材を続け、それをまとめて1回分の記事を書き、連載を続けたことが分かる。雑誌には、この順番で連載を開始したと推定される。

調査力、取材力が傑出していたことが分かる記事をいくつか取り上げてみよう。例えば、「The early life of Abraham Lincoln」の第8章に、奴隷解放の大統領の原点ともいうべき、22歳の青年リンカーンが遭遇した衝撃的な記述が登場する。公開情報をベースに自分の足で稼いだ情報などを織り交ぜて描いたシーンである。

それは、後に「偉大な解放者」と呼ばれたリンカーンが南部のニュー・オリンズを31年5月に訪れ、1か月間に渡って滞在、初めての奴隷市場を見た瞬間の話である。当時、リンカーンは、イリノイ州に住んでいた。カヌーを利用して1000キロ以上も下流のニュー・オリンズを友人らと目指したのである。ターベルは「冒険の旅」と書いている。

交易で栄える当時のニュー・オリンズは、リンカーンにとってキラキラ輝く、目覚ましい新興都市であった。住民は、欧州人と黒人の混血を中心とする地元民を中心にドイツ人、フランス人、スペイン人、黒人、インディアンが加わり、街の雰囲気はもちろん、文化なども国際都市特有の百花繚乱の様相を呈していた。実際、リンカーンらが舟で下ってきたミシシッピ川を利用した内陸との物資輸送はかなり盛んであったし、沖合の海上には海賊がたむろしていた。

ニュー・オリンズは、その頃、奴隷市場の街として栄えていた。人口の3分の1は奴隷。男女が動物のように売買されていたのをリンカーンは、ここで初めて目撃した。友人のハーダンによると、リンカーンは、ニュー・オリンズでの初めての体験を何度も何度も口にしていたと証言している。もっとも、黒人奴隷は、南部に多かったにしても全米にいたはずだから、その非人間的な売買を見たのが初めてということなのではないか。

リンカーンは「奴隷制度の真の恐ろしさを見た」と証言していた。黒人奴隷が鞭打たれ、痛めつけられていた。奴隷制度の非人間的性に対しリンカーンの正義と公正の観念が強い嫌悪感を生じさせた、としている。「奴隷制度がこの瞬間、リンカーンを捉えた」ということであるだろうか。

もう一つ逸話がある。ある朝、リンカーンが友人らと散歩中に奴隷の競り市に通りがかった。快活でかわいい黒人の少女が競売にかけられていた。少女は、買手らの手で身体検査を受けていた。買手らは体をつねり、少女の動きをみるために、馬のように速足で歩かせたりしていた。競売人は、「十分満足されましたでしょうか」などと声を掛けていた。強い不快感を覚えたリンカーンは、そこにいることに耐えきれず、立ち去った。その際に、リンカーンは、「この奴隷制度に打撃を与える機会があれば、自分は激しく攻撃するだろう」と語った、とターベルは書いている。いずれも、調査や取材で得た情報を基に執筆した成果である。

歴代の米大統領で1、2位の人気を誇るリンカーンは、志半ばで暗殺された悲劇の大統領ということでも知られている。南北戦争で、南部同盟が降伏し、戦争が終結した5日後の65年4月14日夜、ワシントンのフォード劇場で夫人と観劇中に、至近距離で後ろから近づいた著名な俳優の凶弾に倒れた。ターベルは、リンカーンの暗殺がニューヨークなどでどう伝えられ、市民はどんな反応を見せたのかなどについても描写している。それを見てみよう。

記事は、「The life of Abraham Lincoln IV」の第31章「Lincoln's funeral(リンカーンの葬式)」に取められている。ターベルは様々な人物に取材し、その日のことを再現している。

リンカーンが暗殺された翌日の15日の土曜日のニューヨーク。早朝に配られた初版の新聞の内容は、「ワシントンでリンカーン大統領は致命傷」だった。その頃は、まだ死亡は確認されていなかった。2時間後に号外が出た。見出しは、訃報を伝える「リンカーン大統領が死亡」に変わった。悲しい知らせが伝わると、通りを歩く多くの人は眉をひそめ、白い顔でうなだれて、さながら死のような静寂が街を包み込んでいた。商店は、臨時休業となり、株式市場は閉鎖された。

ターベルは、ある大学教授の発言を引用している。「当時、私は、イリノイ州の印刷所で働いていた。午前の早い段階に青ざめた顔をした編集長が電報を見ながら入ってきた。何も言わず、植字工らにそれを手渡した。受け取った植字工らは、活字を置き、帽子をかぶり、コートを着て何も言わず、次々と街へ出て行った。電報が間もなく私のところに回って来た。それには、『リンカーン大統領が前夜狙撃され、今朝死亡した』とあった。私も帽子をかぶり、コートを着て通りに出た。町中のすべての人々が仕事を止めたようにみえた。静かで顔色は青ざめ、緊張した面持ちで、次は何が起きるのだろうと皆注視していた」。

全米を襲ったこの衝撃ですべてのビジネスはストップ、一帯に掲げられていた南北戦争の勝利の旗が引きずりおろされ、弔意を表す喪章へと付け替えられた。その日のニューヨークは、昼前には、既に喪服姿であふれていた。悲嘆に暮れたのは、ブロードウェイやワシントン広場、5番街だけではなかった。アイオワ州の上院議員は、「午前9時ごろには、暗殺されたとの情報が入った」と書き記している。市民は、さらに詳しい情報を待ち望んでいた。リンカーンの死に弔意を示す動きはさらに広がっていた。農場の農夫は、仕事を休み、あらゆるドアの取手に弔意を表す、黒の細い布切れが結ばれていた。

奴隷制の存続で南北戦争を闘い続けた南部には共鳴する声もあった。リンカーンの死を「歓迎する」との声がニューヨークでも聞かれた、などのその日の様子を克明に記録している。

以上のように、リンカーン伝では、公開情報や読者から寄せられる様々な情報をベースに取材し、書きあげていったことが分かる。骨の折れる、緻密な作業であるが、それは、ロラン夫人伝、ナポレオン伝で編み出した手法であった。これは、調査報道に最も必要とされる要素でもある。

リンカーン伝では、ターベルは新しい情報の掲載と事実関係の正確さにこだわった。毎日寄せられる読者からの手紙で使えるような材料があれば、いつでも出撃し、取材に赴く体制を整えていた。事実関係は、ダブルチェックした。面白い記事であることを最優先し、オーナーのマクルアーは、記事を3度読み直し、満足いかなければ書き直しを命じた。

寄せられた手紙には、リンカーンの直筆の手紙や演説が入っていた。こうした未公表の遺品は連載が終わるころには300を超えていた。正確な情報をかき集めるため取材した相手は数百人を数えていたのである。精力的な取材活動の結果、ターベルは体調を崩し、休養を余

儀なくされた。以降、ターベルは、毎年ニューヨーク州ロチェスターのサナトリウムで休養するのが常となった。

4. 広がる米国人脈

最後に、ナポレオン伝とリンカーン伝の執筆を通じてジャーナリスト、アイダ・ターベルがどのような過程を経て成長したのかを考えてみよう。

第1は、女性ジャーナリストが必ずしも多くない時代に単身、見知らぬ世界に乗り込み、自らの目指す情報を死にももの狂いで、足を棒にして歩き回りし、協力者を見つけ、探し当てに成功した。この積み重ねであった。時代背景を念頭に置くと、リンカーンの長男ロバートが、執筆終了後にターベルに対し作品の素晴らしさをほめたたえた書簡が指摘するように、未知の世界に飛び込む勇敢さ、臆せず様々な人に会い、話を聞くという積極性と、何事にも挑戦しようとする前向きの姿勢は何よりも称賛されるべきであろう。

第2は、やはり、取材力を着々と着けていったことである。ナポレオン伝の執筆では、当初予定していたフランスへの取材旅行こそ実現しなかった。ワシントンへ行ってみると、関連の情報が山のようにあることが分かったためである。孤軍奮闘し、國務省を訪ねると、外交文書を含めて、様々な言語による当時の資料が眠っており、それが利用できることを突き止めた。

リンカーン伝では、連載の始まる前からケンタッキー州入りし、基礎となる情報を裁判所や新聞社などを訪問し習得、地元住民に果敢にアタック。リンカーンを知る一般市民からの生の声を集めた。

何よりも増して取材力の強化につながったのが第3の豊富な人脈である。過去の論文でも指摘したことであるが、ターベルは、傑出した人脈の形成で驚くほどの巧みさを持ち合わせている。筆力も大事であるが、優れた記事を書くために必要なことは、まず、質の高い、生きた情報を入手することである。

情報は、人からもたらされるのがほとんどである。その意味からも重要な情報を持つ人物との人脈あるいは、様々な人に通じているヒューマンネットワークを構築している人物と知り合い、太い絆を築くことが肝要となってくる。それには、まず、相手に拒否反応を持たれるような人物では決してあってはならないし、2度と会いたくない人物であってはならない。

情報は基本的にはギブ・アンド・テイクである。ある程度の情報がなければ、相手からの情報提供を期待することはできない。そういう意味では、ターベルは情報に精通していたのだろうし、新しい情報の入手に貪欲であった。

パリ留学中もそうだった。ロラン夫人伝を書くために奮闘努力し、その結果、夫人の末裔と知己を得ることに成功した。夫人伝の執筆で大きな成果をあげることができたのは、ロラ

ン夫人の末裔と知り合ったことがきっかけであった。これにより、未公表の資料はもちろん、当時の夫人が結婚直後に夫と生活を共にした古城を訪問し、そこで何日か過ごし、皮膚感覚でロラン夫人を感じる事ができた。

さらに、ふつうのフランス人であっても参加はおろか、存在さえも知ることのない、夫人の末裔の主催する仏知識人の集まるサロンへの出入りも許され、当時のフランス上流階級と交流する機会を得ることができた。そこでフランスの上流階級の考え方、常識、関心事などを学び、普段は閉ざされているフランス社会を覗き見る事ができたのである。そうした人脈は、ジャーナリストにとって最高の財産である。

サロンへの参加を通じてフランスの政治家との交流も始まり、フランス政治の構造なども知ることもできた。そうした階級は一般的に情報の宝庫でもある。新しい情報、関連情報を入手したければ、その場で培った知己を通じて専門家を紹介してもらえば、事足りる。

そうした友人を介して紹介を受けた専門家は往々にして第一級の情報を持ち合わせているし、運がよければ、さらに詳しいその道の通を紹介してもらえたりする。

ナポレオン伝を執筆する際に知り合った米国でも1、2を争うナポレオンの遺品の収集家でもある法律家ハバードは、首都ワシントン屈指の人脈を誇っていた。社交にも熱心で、政治の街ワシントンの政治家、官僚など多くの知人が周りに集っていた。ターベルもその人脈の輪に溶け込み、様々な人々と知り合いになる。

リンカーン伝の執筆でもこのワシントン人脈が奏功した。ハバード夫人の紹介を受けたシカゴの富豪夫人がリンカーンの長男であるロバート・トッド・リンカーンを紹介してくれた上に、ロバートに対し、未公開の秘蔵品をターベルへ提供するよう依頼してくれた。この富豪夫人にロバートは過去に大変お世話になり、恩義を感じていたのだろう。

背中を押されたロバートは、「いいでしょう。たいしたものではありませんが」と言って、本邦初公開の銀板写真を提供してくれた。これは、富豪夫人の口添えがなければありえなかった話である。そういう意味では、人脈は取材活動で大きくものを言う。この写真が突破口となりターベルの記事の掲載されている雑誌の発行部数が順調に伸び始めたのだからオーナーのマクラーアにとってもありがたい限りであったろう。

ハバードについてターベルは自伝の中でこう語っている。「私の社会生活は、ハバード夫妻の継続的な親切の上に形成されていた。ほとんど家族の一員で、夫婦の友人の中に自由に入っていた。外交官、政治家、著名な来訪者を含めたご夫婦の交際範囲の輪は、幅広く、その中心は、スミソニアン博物館や農務省、地質調査、鉱物事務所、天文台などで仕事をする傑出した科学者らの大きなグループだった。この街では、ハバード氏ほど尊敬されていた人はいなかった。その中心は、ハバード氏の娘婿のアレキサンダー・グラハム・ベル氏であった」。老夫婦と子供の世帯は、「スープの冷めない距離」に住むのが最適だといわれるが、それを実現させたかのように、グラハム一家は、ハバードの家の向かいに住んでいた。

2人の伝記の記事が雑誌に掲載され始めると読者から反響が届いた。特にリンカーン伝は、わずか30年前の大統領だったから、その分、思い出を持ち合わせていた市民は多く、記憶を綴る手紙が殺到した。ターベルはその手紙をいつも大きな袋に入れて持ち歩いていた。いや、むしろそうした市民からの情報を基に、取材し、記事を書いていた側面があった。

ハーバードとの交流はその後も続く。娘が電話を発明したベルの妻ということで、米国科学界のトップレベルの知名度を誇るベルやベルを囲む科学者や経営者らとの交流も始まる。この流れから米最大の博物館で知られるスミソニアン博物館の館長をはじめとした首都ワシントン一流の人物とも出会い、人脈がさらに拡大した。

2つの伝記で知名度の増したターベルは、軍人への人脈も拡大させる。頻繁に取材していた軍の最高司令官ネルソン・マイルズ将軍との取材中に米西戦争の発端となる米戦艦のハバナ港での沈没の第一報が入ってきた。98年2月16日午前、将軍と軍の執務室にいた時である。後に大統領にまで上り詰める当時長官補のセオドア・ルーズベルトも海軍で仕事をしていた。米戦艦メイン号沈没の時にルーズベルトは、海軍とほかの省との間を何度も行ったり来たりしており、「ローラースケートの少年」だったとターベルは自伝で評している。ルーズベルトは、独占禁止法の運用を強化し、反トラスト法をスタンダード石油に適用し、告訴、解体にまで追いやった政治家である。ターベルとは、切っても切れない関係にあるのだが。縁をたどれば、ここまで遡るようだ。

ターベルは、この頃のルーズベルトを好意的に見ていない。というのは、米国がスペインに対し宣戦布告した直後に海軍省を辞職し、義勇軍を募る活動に入ったためだ。結成した義勇軍の大佐としてルーズベルトは軍を指揮した。この行動に対しターベルは、「ルーズベルトは、軍が自分を必要としていたと感じていたのであれば、実際には明らかにそうだったのであるが、辞任するべきでなかった。それは礼儀ではない」などとコメントしている。ターベルはこの義勇軍の結成に賛成ではなかったようである。

5. 米国の再発見

リンカーン伝の執筆と米西戦争は、ターベルのフランスに対する情熱を揺さぶる転機となった。自伝の中で「Rediscovering my country(自国の再発見)」とした第10章を設け、その思いをこう表現している。やや長くなるが引用しよう。

「公務についている人々の責任の意味、個性の激突、野心、裁定、理想の重大さを学んだ。私は長年、それを持ち合わせていなかったから、自分に問いかけ出したのは、さほど前ではなかった。自分は、彼らが働いている民主主義制度の中の一部なのである」、「この制度に奉仕するために自分の仕事を使うべきではないのか。外国に逃げて、単なる傍観者ではあることはできない。実際、フランスの大きな魅力の1つは、そこでは市民として何ら責任を負っ

ていないこと、それに疑問を持ち始めた。パリを諦めなければならない。事実上忘れていた米国の市民権を実感していた」。

ターベルは、リンカーン伝を書き上げる中であれほど憧れ、好きだったフランスへの関心が自分の身体から次第に抜けていくような感触にとらわれていた。自由、博愛、平等の国のフランス行きは、フランス革命で活躍したロラン夫人を通して女性としての生き方を探求する旅でもあった。留学からの帰国の際は、再訪時には、ここに住み、あそこに行き、こんなことをすると具体的な生活設計を描いていた。それが一瞬にして霧散したのである。裏を返せば、それは、米国への関心が高まってきたことに他ならない。フランスはやはり、自分の国ではなかった、ということであろうか。そして、ロックフェラー帝国のスタンダード石油の国内での傍若無人な振る舞いに次第に目が向いてきた。

ターベルの傑出した取材力は、今回のリンカーン伝で磨きがかかった。ロラン夫人伝で培った新聞、雑誌、公官庁の情報、裁判記録などのいわゆる公開情報をベースに、手当たり次第キーパーソンに当たり、情報を確度の高いものへと収斂させていく。取材拒否にあってもくじけず、他の有力な情報提供者を見つけ、完成度を上げていく。この手法は、4年続いたリンカーン伝でさらに盤石なものになったといえよう。

ターベルの優れた記事が生まれた後ろには、傑出した時代感覚を持ち、あれこれアドバイスしてくれ、巧みなデスクワークで支えてくれた編集陣がいたことを忘れてはならない。この裏方がいなければ伝記はやや違った内容になっていたかもしれない。調査報道の一時代を築いたこの編集陣については、次回以降に紹介することにしよう。

◎参考文献

【調査報道関係】

- ・朝日新聞取材班「証拠改竄」（朝日新聞出版、2011年）
- ・朝日新聞特別報道部著「プロメテウスの罫」（学研パブリッシング、2012年）
- ・谷久光著「朝日新聞の危機と『調査報道』」（同時代社、2012年）
- ・高田昌幸、小黒純著「権力VS調査報道」（旬報社、2011年）
- ・田島泰彦、原寿雄、山本博著「調査報道がジャーナリズムを変える」（花伝社、2011年）
- ・W・A・スウォンバーグ著「ピュリツァー」（早川書房、1973年）
- ・デイヴィッド・ナソー著「新聞王ハーストの生涯」（日本経済新聞社、2002年）
- ・Hugo de Burge著「Investigative Journalism」（Routledge、2000年）
- ・David Anderson and Peter Benjaminson「Investigative Reporting」（Indiana University Press、1976年）
- ・Ann Bausum著「Muckrakers」（National Geographic、2007年）

【ターベル関連】

- ・S. S. McClure著「My Autobiography」（Frederick A. Stokes Company、1914年）
- ・Ida M. Tarbell著「All in the Day's Work」（1939年）
- ・Adrian A. Paradis著「Ida Tarbell- Pioneer Women Journalist and Biographer」（1985年）

- ・ Steve Weinburg 著 「Taking on the Trust」 (W.N. Norton、2008年)
- ・ Barbara A. Somervill 著 「Ida Tarbell- Pioneer Investigative Reporter」 (Morgan Reynolds Publishing、2002年)
- ・ Kathleen Brady 著 「Ida Tarbell-Portrait of a Muckraker」 (University of Pittsburg press、1989年)
- ・ Willa Cather 著 「The autobiography of S.S. McClure」 (University of Nebraska Press、1997年)

【ナポレオン関係】

- ・ ロジェフ・デュフレス 著 「ナポレオンの生涯」 (クセジュ文庫、訳安達正勝、2006年)
- ・ ポール・ジョンソン 著 「ペンギン評伝双書 ナポレオン」 (岩波書店、2003年、訳富山芳子)
- ・ 新人物往来社 著 「ナポレオン」 (新人物往来社、2011年)
- ・ Ida M. Tarbell 著 「A short life of Napoleon Bonaparte」 (Kessinger legacy print、1894年の復刻版)

【リンカーン関係】

- ・ 井出義光 著 「リンカーンー南北分裂の危機に生きて」 (清水新書、1990年)
- ・ カール・サンドバーク 著 「エイブラハム・リンカーン I、II、III」 (新潮社、1972年、訳坂下昇)
- ・ 松岡洋子 著 「リンカーン」 (講談社、1981年)
- ・ Ida M. Tarbell 著 「The early life of Abraham Lincoln」 (Hard Press Publishing社、1896年の復刻版)
- ・ Ida M. Tarbell 著 「The life of Abraham Lincoln Vo.1」 (General Books. LLC 復刻版)
- ・ Ida M. Tarbell 著 「The life of Abraham Lincoln Vo.4」 (Nabu Public Domain社、1900年の復刻版)
- ・ Ida M. Tarbell 著 「In Lincoln's Chair」 (The Macmillan Company 1920年の復刻版)
- ・ 登場する米国の人物については、ウィキペディアなどを参考にした。